教育活動に果たす理想的な環境とは
―短期大学での取り組み事例を中心に―

報告者
西本　祐攝　（大谷大学 短期大学部 講師）
和田　幸子　（龍谷大学 短期大学部 助手）
三木　慰子　（大阪青山大学･大阪青山短期大学 学習支援室長 教授）
岩﨑　千晶　（関西大学 教育推進部 助教）

コーディネーター
山田　恵文　（大谷大学 文学部 講師）

参加人数
40名

近年、学生を様々な側面から支援するために、学習支援室や共同学習スペースなどを設置する動きが広がっている。その規模や形態、支援内容は、大学規模や教育目的によって多様なあり方を示している。そこで、本分科会では特に短期大学での事例を紹介することによって、教育活動における理想的な環境について考える機会を設けたい。

短期大学を取り巻く状況は大変厳しいが、その中でもきめ細やかな教育など短大ならではの特色を生かして奮闘している機関も少なくない。特に学習・学生支援において「場所」が重要な役割を果たしている事例を報告することによって、本来、教育活動においてどのような環境が望ましいのか、本質的な所から議論し課題を共有していきたいと考えている。短大のみならず中小規模大学での課題にも応えうる機会になればと期待している。

〈第５分科会〉

教育活動に果たす理想的な環境とは
―短期大学での取り組み事例を中心に―

趣旨文

近年、学生を様々な側面から支援するために、学習支援室や共同学習スペースなどを設置する動きが広がっている。その規模や形態、支援内容は、大学規模や教育目的によって多様なあり方を示している。そこで、本分科会では特に短期大学での事例を紹介することによって、教育活動における理想的な環境について考える機会を設けたい。短期大学を取り巻く状況は大変厳しいが、その中でもきめ細やかな教育など短大ならではの特色を生かして奮闘している機関も少なくない。特に学習・学生支援において「場所」が重要な役割を果たしている事例を報告することによって、本来、教育活動においてどのような環境が望ましいのか、本質的な所から議論し課題を共有していきたいと考えている。短大のみならず中小規模大学での課題にも応えうる機会になればと期待している。

1　分科会のねらい

高等教育機関には、学生の日々の学習や生活のサポートをするための様々な施設があるが、近年、「共同学習スペース」の設置が各大学で盛んになっていることが注目されている（註1）。その背景の一端には、過去の中央教育審議会の答申において提言されているように、学生の学習時間を確保し単位制度の実質化を図る（註2）ことや、従来の知識伝達型の受動的な授業形態から、双方向型の授業形態へ転換することによって、学生の主体的な力を育む（註3）といった、国や社会からの高等教育に対する要請がある。現在、各大学はシラバスの改善を通して授業時間外学習を促したり、アクティブラーニングを取り入れた授業を積極的に導入したりするなど、学生が主体的に学ぶ力を育むための様々な取り組みを実施している。そのサポート施設として、ラーニングコモンズに代表されるように、正課外において協同的な学習を可能とする学習スペースの設置がなされてきているということが言えよう。

また、学生の様子に目を向けると、大学はユニバーサル段階に入り、多様な学生が在籍することによって、きめ細やかな指導がより一層必要になってきているということが言える。そのために、教員が個々の学生の状況を把握し、適切な個別指導をするための、学習支援・学生支援の性格を強く有する施設も存在してきている。

このような学生の学びを支援する施設の形態は、各大学の規模のほか、在学生の特性、教育理念、教育内容によって多様なあり方を示している。その全てを網羅して理想的な学習環境を議論するのは難しく、また論点が定まらない可能性があるので、本分科会では特に短期大学（延いては中小規模大学）における学習支援施設に絞ることとした。

短期大学については、過去のフォーラムにおいても度々取り上げられ（註4）、

1、短期間で専門職業人を育成する。
2、教養教育と結びついた専門職業教育を行う。
3、少人数クラスできめ細やかな指導がされる。

などと、その教育の特色が確認されてきたと言えよう。学生の確保など短大を取り巻く状況は大変厳しいが、多様な教育機会の確保という点から、短期大学には高等教育機関としての役割があり、社会に果たすべき使命がある。短大関係者は、各方面からの期待に応えるべく、様々な課題と葛藤を抱えつつ、それぞれの現場で尽力されていることであろう。

さて、二年間の短期間で専門職業人として社会で活躍できる人間を育成するために、また、その実現に向けてきめ細やかな指導をするために、学

習支援の施設はどのような機能を果たしているのであろうか。また、理想的な環境とは、いかなる学習環境であるのか。今回、「場所」を中心にして効果的な教育活動を行っている事例を報告することによって、参加者と共に理想的な学習環境について検討する機会を提供した。

2　分科会の概要

午前の部では、各登壇者より約25分ご報告いただいた。

大谷大学短期大学部の西本氏からは、「仏教科研究室」を場として、学習支援･学生支援･教員連携･授業改善が行われていることが報告された。これは1950年に仏教科が開設され、1978年に現在の研究室が設置されて以来、伝統的に構築されてきたシステムである。この研究室を中心にしたFD活動のキーパーソンとなるのが専任助教である。助教は研究室に常駐し､学習指導､生活相談にあたる。また各教員との連携を図って、個々の学生に対して適切な支援を行ったり、学生からの情報を基に授業改善を提案するなど、学生支援のほか学習環境の整備全般を助教が担っていることが報告された。また、仏教科には年齢層の異なる多様な学生が在籍し、研究室において学生同士、学生と教員、教員同士の交流が自然に生まれていることが報告された。その中で、特筆すべきは、教員自身の教育力の向上に研究室が機能しているという点である。他の教員がどのように学生を指導しているのかを研究室で目の当たりにすることによって、教員自身が教授法を学んでいるという報告であった。

龍谷大学短期大学部の和田氏からは「こども教育多目的室」における活動報告である。こども教育多目的室とは、短期大学部にこども教育学科が新設されたことに伴い設置された施設である。和田氏はその立ち上げ以来、室のデザインから管理運営に至るまで中心的に関わってこられた方である。今回、2011年度からの3カ年に渡るこども教育多目的室における活動内容と課題についてご報告いただいた。

学生が正課の授業で学んだことをより充実発展させるために実践している、ワークショップや実習直前サポート、保育実践教材集づくりなどの取り組み事例と､利用者をいかに増やすかなどといった現在抱えている課題とをお話しいただいた。保育者養成教育における正課外活動をいかにサポートしていくかという課題を抱える関係者にとって、こども教育多目的室という場所を中心とした活動報告は大いに資するものがあったと思われる。

大阪青山大学・同短期大学の三木氏からは、2008年度に設置された「学習支援室」での様々な取り組みについてご報告いただいた。学習支援室では、個々の学生に対して適切な学習・学生支援を行えるように、教員や各部署と連携を取りながら支援内容の充実を計っていることが報告された。その報告からは、教員並びに学生向けのアンケートや利用状況の調査データが有効に活用されていることが窺えた。また、資格取得を目指す学生たちは時間割が固定され、他学科・他学年との交流が困難である。この状況を打破する一つの方策として、2013年度に青山コミュニティという交流の場を形成し、卒業生と在学生（他学科・他学年）とスタッフとが交流する様々な講座を開設したことをお話しいただいた。同様の課題を抱える短大関係者にとって、いかに人的交流を生み出すかという課題を解決するためのアイデアをいただくご報告となったと思われる。

関西大学の岩﨑氏からは、近年、共同学習スペースの設置が盛んになってきた背景と現状をお話しいただき、またコモンズの一つの事例として、関西大学のコラボレーションコモンズの紹介をしていただいた。まず､学習支援施設設置の背景として、国や社会から、新しい能力の育成が期待されていることや、アクティブラーニングの導入がすすめられていること、授業以外の学習時間の確保が求められていることなど、様々な要因が絡んで、協同的自律的な学習を育むための場が必要となってきていることが報告された。また、コモンズの形態とその要素について説明いただいたが、この中で特に印象に残ったのは、構成要素の一つとして、カフェエリアが取り上げられている点である。学生の利用を促すためには、快適性・利便性が考慮されねばならない。いくら高い理念を掲げて場所を構築しても、そこが学生にとって居心地の良い空間でなければ実質性を持たないということを考えさせられた。これから学習環境を整備しようとしている機関の関係者にとって、岩﨑氏の報告は、その道筋を示して下さるものであったと言えよう。

午後の部では、参加者から提出していただいた質問票に基づいて、登壇者によるフリートークを行った。また、終盤では、参加者を7つのグループに分けて、登壇者も加わりグループワークを行った。ワークシートに基づいてグループ内で自己紹介をした後、自由に話し合ってもらった。北海道から沖縄まで、全国各地から短大を中心に各高等教育機関の教職員が参加されており、各大学の実情を話し合う貴重な情報交換の場となったようで

ある。ただ、時間配分を誤り、グループワークの時間を十分に確保することができなかったことが残念であった。その結果、各大学が抱えるそれぞれの課題を共有することまではできたが、どのように克服していくかという議論にまでは至ることができなかったのではないかと思われる。

3　まとめ

今回、正課外において学生をサポートするために、どのような学習環境を構築すべきか検討する場を設けた。そして、4つの機関から事例報告をいただいたが、それぞれ規模や形態、支援内容などに違いはあるけれども、共通するのは、そこが様々な人々との交流を生み出し、学生自身の育ち（更には教員の育ち）に資する場となっていることであった。例えば、自分と異なる分野を学ぶ学生や、先輩後輩、更には卒業生と交流することは、学習意欲の喚起のほか、新たな知見の獲得や創造力の育成などといった効果が期待できる。学生の可能性を拓くという観点から言えば、理想的な学習環境とは、多様な人々と交流することができる「開かれた場」であるということが重要なポイントになると思われた。

一方で、登壇者の報告や参加者との対話を通して明らかとなったことは、いかに人的交流を生むかという課題を多くの関係者が抱えていることである。今回焦点を当てた「場所」は、その人的交流を生むための重要な要素である。しかし、ただ場所さえ造ればよいということではなく、そこにおいていかに人的交流を生むか、その仕掛け作りの重要性が確認された。どの登壇者からも、いかに学生同士の交流を生み出すか、様々な工夫や配慮をしていることが報告されたことに注意したい。特に短大の場合、時間が限られている。多くの短大では、資格取得のために時間割が固定され、タイトなスケジュールとなって、学生たちは正課外活動を十分行えないという傾向がある。そのような状況の中で、どのように学生同士、学生と教員との交流を生むか、大きな課題となっていることが浮き彫りになった。更には、短大ではTAやSAなどの人員の確保が難しいという課題が挙げられた。それに対しては、他大学との連携をも視野に入れた新たな取り組みを模索する必要があるという意見が提示されたことも、合わせて報告しておきたい。

また、話し合いを通して、改めて短期大学の教育の特色を確認することができた。今回の事例報告は、短期大学・小規模大学での取り組み事例が中心であったが、そこでは学生を育てるために、教員がきめ細やかな指導を行っていることが窺えた。一人一人の学生の状況を把握し、適切な支援を行えるのが短大の利点である。このような短大の教育内容をより充実させていくために、まだまだ工夫の余地があると思われた。2年間という限られた時間の中で、いかに実質をあげていくか、それぞれが課題を確認し考察する糸口を得られた分科会となったのではないかと思う。参加者にとって意義ある分科会であったことを願いつつ、登壇者、スタッフ並びに参加者一同のご協力に対して厚く御礼申し上げたい。

註

1、2013年5月7日 日経新聞（夕刊）、2013年7月1日 日経新聞（朝刊）、2013年8月23日 読売新聞（夕刊）。

2、2008年12月24日 中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」

3、2012年8月28日 中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けてー生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へー」

4、2007年度第13回FDフォーラム第4分科会「短期大学の可能性を拓く」、2008年度第14回FDフォーラム第7分科会「高等教育におけるオルタナティブとしての短期大学」など

（本報告書の作成にあたって、岩崎先生並びに大学コンソーシアム京都事務局よりいただいた資料を活用した。この場を借りて御礼申し上げる。）

教育活動に果たす理想的な環境とは　―短期大学での取り組み事例を中心に―

大谷大学 短期大学部 講師　　西本　祐攝

第19回FDフォーラム
第5分科会

教育活動に果たす理想的な環境とは
―短期大学での取り組み事例を中心に―

ともに育ち合う場の創造
大谷大学短期大学部
仏教科一般研究室の場合

大谷大学短期大学部講師
西本祐攝

大谷大学について

大谷大学は、1665（寛文5）年に開創された東本願寺の学寮をその前身とする。

＊ その後、幾たびかの変遷を経て、1901（明治34）年、学制に根本的改革を加えた近代的な大学として東京・巣鴨の地に開学。

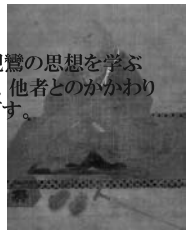
＊ 1911年京都へ移転、1913年現在地（京都市北区小山）へ。

＊ 以来、変遷を経て、現在、文学部9学科、短期大学部2学科を設ける。

短期大学部仏教科

短期大学部仏教科は1950年に開設。
以来、今日まで、

【教育目的】
人間本来のあり方を問い続けた釈尊と親鸞の思想を学ぶことを通して、自分自身への理解を深め、他者とのかかわりを尊重できる自立した人物の育成をめざす。



【教育体制】
仏教科研究室（以下、研究室と略）を中心にした教育を実践。

【教員構成】
＊ 仏教科所属教員（7名）
真宗学、仏教学を専門分野とする教員で構成。
各クラスの指導教員を担当。

＊ 授業担当教員（13名）
真宗学、仏教学、歴史学、哲学を専門分野とする教員で構成。

【研究室の歴史】
＊ 現在の研究室は、学園整備にともない、1978年に現、本学2号館が建設された際に設置。
＊ 研究室中心の教育体制は、それ以前からの体制を継承。

【本日の報告】
1. 研究室体制
2. 専任助教の役割
3. 交流の場としての研究室
4. 教員間の連携の場
5. 授業改善に果たす研究室の役割
6. 卒業研究（論文）の取り組み
7. おわりに

研究室体制

＊ 専任助教（以下、助教と略）1名が常駐。
＊ 開室時間：月曜～金曜　9時～18時
しかし、、、

・18時に閉室することは稀。
・学生は教員が在室する間は何時までいてもよい。
・時には、日付が変わることも、、、。

【蔵書】

* 仏教関係を中心とする4000冊超の図書を配架。
* 本学図書館が管理し、研究室に配架。
* 配架書籍は、助教を中心に学科所属教員間で検討し選定。

専任助教の役割

※学科の教育目的に照らして、
教育と教育環境の維持に必要な実務を行う。

* 研究室の開閉室
* 学生指導
* 学科所属教員会議の進行
* 授業担当教員会議の進行
* 在籍学生名簿の作成、管理
* 学科年間スケジュールの管理
* 備品管理
* 研究室記録
* 刊行物の編集

【要するに】

* 学生指導と学科運営全般に携わる。

授業を担当するとともに、研究室で学生と日頃から身近な関わりを持ちつつ、学習指導から大学生活の相談（大学への要望、世間話等）まで幅広く、対応するよう取り組んでいる。

【相談役、サポート役として】

* 前任の助教が室員（助言者）として在室。
* 前任助教は、現在の助教とともに学生指導に当たりながら、助教の相談に応じ、助言を行う。
* 助教は学生指導や学科運営についてのノウハウを先輩教員から直接学ぶ。

交流の場としての研究室

(1) 学生と教員（助教以外）の交流の場

学生にとって大学生活の拠点。
助教以外の授業担当教員も日常的に活用。

* 学生は自主学習（授業の予習、復習）の他に、直接、授業担当の教員に質問・相談が可能。

(2) 先輩、卒業生との交流の場

【日常的に】

* 本学文学部第3学年に編入学した学生
* 本学大学院に進学した学生

【時には】

* 他大学に編入学した学生
* 就職して社会人となった者

などが来室する開放的な空間となっている。

進学先、就職先の生の情報を直接聞くことで、進路選択の一助となっている。

【在学生、教員、卒業生の垣根を越えて】

【特色】

* 学生と教員や卒業生、教員同士の敷居が低い、というよりもむしろ、ほぼ無い？

＊【一例】
＊蔵書点検　欠本調査（年一回）
＊年末清掃
＊助教と在学生、教員（助教以外）、卒業生がともに協力して行っている。（⇒学生＝利用者という意識を超えて、、、）

教員間の連携の場

＊授業に必要な資料も豊富なため、教員は授業資料作成の場としても活用。

＊授業内容について教員同士が日常的に意見交換を行い、授業間での連携をとって、各授業に臨んでいる。

＊助教は先輩教員の学生指導の方法を直接見て学ぶ。

＊教員は学生指導の後、フォローを助教に依頼。

授業改善に果たす研究室の役割

＊各授業の状況
・進行状況
・学生の出席状況
・学習意欲
などは、授業担当者から助教に随時報告される。

【重要】
助教は、研究室を利用する学生と日常的に対話しているので、授業に対する学生の赤裸々な意見を聞くことができる立場。

助教に集約される報告をもとに、学科所属教員が課題を共有。

↓

即座に対応できる学生の個々の問題から、中長期的な視野で改善すべきカリキュラム上の問題まで検討。

↓

学科所属教員会議。

↓

学科主任が授業担当教員へ授業改善の相談。

卒業研究（論文）の取り組み

卒業研究（論文）を2年間の学びの集大成として位置付けています。

※論文作成スケジュール
＊第2学年6月、題目決定
＊9月、中間報告会
＊11月末、論文提出
＊12月以降の口頭試問
＊論文要旨の作成

（1）論文指導体制

＊学生一人につき指導教員、副指導教員、助教の3名の教員がサポート。
・学生各自が課題とするテーマの決定
・論文執筆に必要な文献の読解
・論文の展開についての構想
・考察内容を文章化していく作業

これらに、上記の3名の教員が携わり、学生と教員とが対話をしながら卒業研究を完成させていく。

(2)論文作成の拠点

論文指導は指導教員の個人研究室ではなく、できるだけ研究室で行う。

* 研究室の資料を活用し、執筆。
* 学生同士と教員同士がお互いに、よい刺激を受けながら取り組むことにもなる。⇒教員が育てられる場。
* 一人ひとりの学生の進捗状況について、教員間での情報共有が不可欠。⇒助教に情報が集約。

(3)論文提出後の指導

* 口頭試問(指導教員、副指導教員の2名で実施)
* 口頭試問を踏まえ、学生は助教の指導による論文の修正加筆、要旨の作成を行う。
* 提出された要旨(卒業生全員分)と、意欲的に取り組んだと思われる論文の数編を、『仏教研究紀要』という冊子に掲載し、卒業式の日に学生と指導を担当した教員に配布。
* この冊子は、次年度の2回生にも4月のオリエンテーション時に配布(論文作成の参考として)。

おわりに

* おせっかいなほど、助教を中心に教員が学生に接する場である研究室と、そこで形成される学生同士や学生と教員との関係が、仏教科における教育、学習の基盤となっています。
* 学生の成長を願う場であるとともに、学生との日常的な交流を通して、教員の成長が願われている場。

こども教育多目的室における学生の活動
～保育実践力が涵養される場～

龍谷大学 短期大学部 助手　　和田　幸子

はじめに（私の履歴と問題意識）

保育の現場で学生実習生を受け入れる立場だった私が、2010 年度より龍谷大学短期大学部の実習指導室教員として、学生を保育の現場へ送り出す立場になった。保育の道を志す学生にとって、実習は子ども達と関わる楽しさを味わい、保育者としての出発点となる。しかし学生は、非常な不安を抱え緊張して臨んでいることを知った。学生が多岐にわたる授業での学びをもとにして保育行為として立ち上げていくために、実習指導室教員としてどのように支援したらいいのか考えさせられ、模索が始まった。各授業で学んだことを統合していくような機会を、保育行為をシミュレーションする中で保証することが必要ではないかと考えるようになった。こうして学生を保育の現場に繋いでいきたいと考えるようになった。

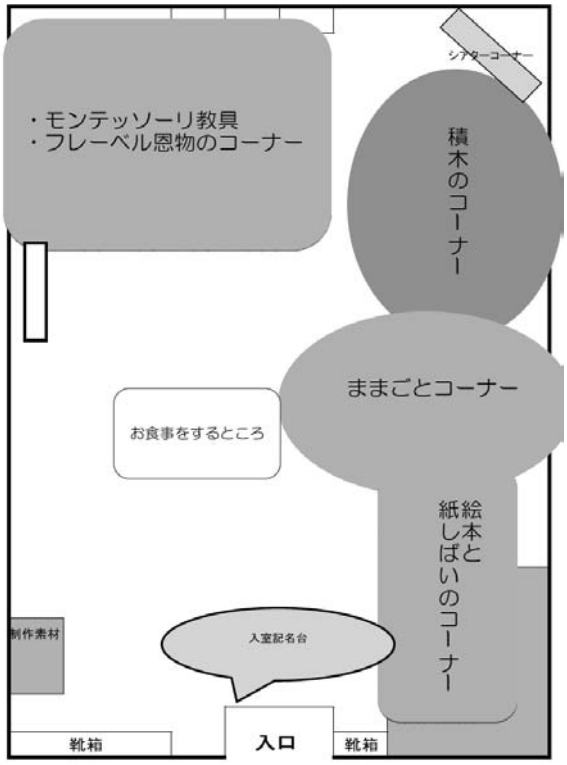
1. こども教育多目的室開室準備

本学では 2011 年度よりこども教育学科が新設され、従来の保育士資格に加えて幼稚園教諭 2 種免許取得が可能になった。私は準備の年から本学に着任したことになる。新学科設置に伴い、本学 21 号館の 3 階に「こども教育多目的室」が設置されることになり、内部設備、備品の選定、発注については、先生方と相談しながら進めた。その際イメージしたことは、こどもの生活や文化に触れて様々な遊びを体験でき、保育室さながらの場にしたいということであった。国内外の玩具（フレーベル恩物、モンテッソーリ教具含む）、絵本、紙芝居、人形、パネルシアターなどの教具、児童文化教材、画用紙、折紙、毛糸、ビーズなど、こども達が手にしたくなるような素材を、可能な限り良質な物で揃えたいと考えた。また、各コーナーが見渡せるように室内をレイアウトし(図 1)、自ら手を伸ばして取りやすい配置にした。季節を感じられるような壁面利用、空間を感じられるような天井の利用、光の取り入れ方を考えた。

龍谷大学大学教育開発センター自己応募研究プロジェクト 2011～2012 年度 FD 活動に「保育実践力育成のための教授法開発とその検証―『こども教育多目的室』活用を中心として―」を 3 教員で応募、採択され、こども教育多目的室を拠点として正課授業と学生の正課外活動を繋ぎ保育実践力を育成すべく取り組みを開始することになった。こうした中で 2011 年度こども教育学科 1 期生（定員 90 人）を迎えた。

このプロジェクトでは保育実践力を以下のように考えた。

“保育実践力”とは、保育の特質、乳幼児期の発達特性を理解し、
1. 応答性：人や物と応答的にかかわる力。
2. 柔軟性：保育者の指導性とこどもの主体性のバランスを取りつつ、場面や状況に柔軟に対応する力。
3. 創造性：こどもと共にイメージをふくらませながら、遊びを創造していく力。
4. 構成力：こどもの遊びや生活の充実のために、保育環境をデザインする力。
これらは座学での知識の獲得のみならず、こどもの“生活や遊び（文化）”のなかに、自らの身を置くことによって涵養されるのではないか。



(図 1) こども教育多目的室見取り図

そこで、プロジェクト参加の教員担当授業と「実習事前事後指導」を対象の正課授業とし、そこでの学びをこども教育多目的室での正課外活動によって充実させ、相互の往還をするという体制づくりを試みることになる。

2. 本報告の目的と方法

本報告ではこども教育多目的室を拠点とした学生の保育実践力育成への取り組みのうち、正課外活動に焦点をあてる。FD 活動として行った 2011,2012 年度、そして FD 活動を終えてからの 2013 年度の 3 年間を振り返り、保育者養成教育において〈こども教育多目的室〉

という場が果たした役割と可能性、浮かび上がってきた課題について提示することを目的とする。

本活動では主に①昼休み開室　②ワークショップ　③実習直前サポート　④教材集づくり　に取り組んできた。この 4 点について、経過と結果を記していくことにする。

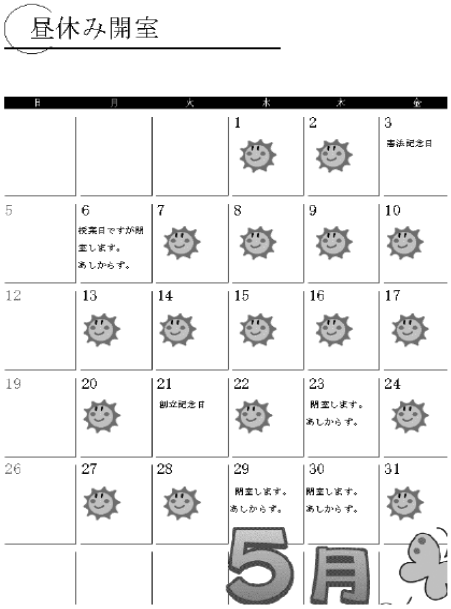
3. 経過

①昼休みの開室

授業期間中の月～金曜昼休み(12:15-13:15)を開室することにした(写真 1)。1,2 回生共に実習事前指導の授業内で案内プリントを配布し、掲示板、大学ホームページでも呼びかけた。開室時には私が在室した。代わって実習指導室スタッフが在室することもある。

(写真 1) こども教育多目的室の開室

2013 年度は FD 活動を終えていることに加え、実習指導室のスタッフ数減少となったことから、あらかじめ開室が難しいと予想される日は閉室することにし、月ごとの開室日を記して掲示案内することにした。また 3 講時の授業が 13:15 から始まることから、昼休みの開室を 13:10 までと変更している。このように、無理なく開室を継続しようとした。



入室後、靴をくつばこに入れること、入室者記名することは勧めたが、その他は特に決まり事は作っていない。飲食、電気ポットや電子レンジの使用も可能である。私は環境設定、工作準備をしながら、学生の様子を見守る。学生の自主活動の内容は、室内各コーナーの備品に触れて体験することから始まり、授業制作課題の取り組みや、授業でのグループ発表の話し合いへとすすみ、実習前には指導案作成や準備物を作成することがみられた。就職活動の時期には実技試験の練習を相互に見合う姿があった。

②ワークショップ

2011 年度、2012 年度には水曜日昼休みにワークショップを開催した。

幼いこどもは、他者の姿を見て、同じようにしてみることによってできることが増え、そのような体験を重ねることによって育っていく。保育者はこどもが見て・真似てみたい動機を与える存在なのである。そのようなこどものあり方を学生が体験すること、つまり自らもしてみたいと感じるようなしかけ作りを試みようと考えた。伝承遊び・歌および音楽遊び・絵本読み聞かせを内容として設定し参加を呼びかけた。具体的には季節にちなむ活動を取り上げた。例えば、7 月初めには七夕まつりとして、短冊づくりと七夕の歌のトーンチャイム演奏、七夕にまつわる絵本の読み聞かせという流れで 30 分間設定した(写真 2)。またパラバルーン遊び(写真 3)、新聞紙を使った遊び紹介、あやとり、というようにテーマを決めた活動を設定した。

(写真 2) 七夕まつり

(写真 3) パラバルーン遊び

2013 年度は特にワークショップという形での呼びかけはせず、昼休みの自主活動の際に経験できるように環境を準備した。

③実習直前サポート

保育実習、幼稚園実習の直前には終日開室し、学生が実習準備、相談ができるようにした。案内プリントには下記のように記した。

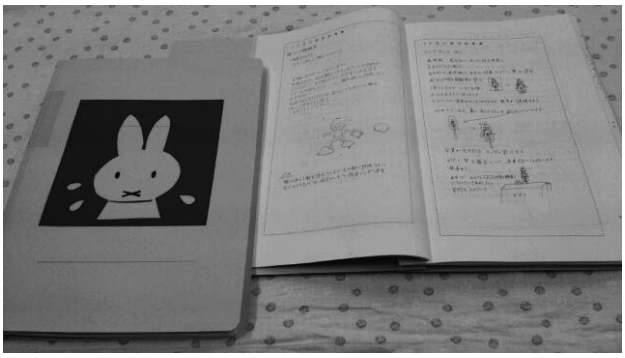
こども教育多目的室において，保育実習，幼稚園実習の準備，　制作，　部分保育の相談，の支援をします。

- 子どもたちへ自己紹介してみよう
- 絵本を選んでみよう
- 折り紙、あやとりなどの伝承遊び
- 子どもの歌をうたおう
- 手遊び, からだ遊び
- 寄せ絵づくり

④教材集作り

2012 年度には、2 回生となったこども教育学科 1 期生を保育実習ⅡⅢ、幼稚園本実習へと送り出すことから、2 回生への保育実践力育成の支援を重点的に行う必要があった。そこで、実習事前指導の授業で行う模擬保育や保育案作りをまとめて、学生が教材集として用いられるような『保育実践教材集』を作成した。できあがった『保育実践教材集』の概要は以下である。

A4 サイズ縦型ファイル（水色）に、学生による保育教材案を印刷し、挟み込んだ。内容は〈こどもたちと 5 分間楽しむ保育案〉〈こどもたちと 10 分間楽しむ保育案〉〈3 才児の設定保育案〉〈4 才児の設定保育案〉〈5 才児の設定保育案〉〈わたしのお気に入り絵本〉および各自が記入したワークシート原紙である。総ページは 196 ページ。授業内で配布した。シール色紙を切り貼りして表紙をつくり、各自の『保育実践教材集』を作った(写真 4)。

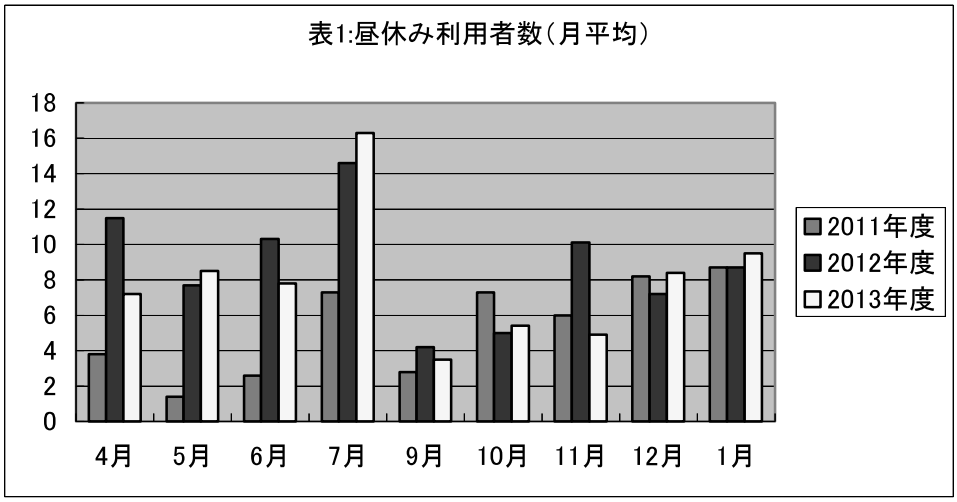


（写真 4）保育実践教材集

4. 結果

①昼休みの利用/自主活動

2011、2012、2013 年度の昼休み月平均利用者数を、表 1 に示した。



2011 年度の利用について振り返ると、2011 年 4～6 月の利用が少ない。意気込んで開室したものの、学生への周知が行き届かなかったからであろうか。しかし 7 月末からの保育実習ⅡⅢに向けての準備のためこども教育多目的室を利用する 2 回生が次第に増えてきた。そして後期には各日 6～8 人ずつの利用へと定着してきた。これは、実習を終えた 2 回生が実習の振り返り発表の準備のために利用していたことによる。2011 年度を通して 1 回生、つまりこども教育学科 1 期生の昼休み利用は少なく、1 回生への利用周知の難しさについて考えさせられた。

しかし、2012 年度は年間を通して 1 回生、つまりこども教育学科 2 期生の利用が盛んであった。入学後すぐから仲間と連れだって利用し、教具、おもちゃで遊ぶ姿が見られた。2 期生は入学前よりオープンキャンパスや大学案内でこども教育多目的室のことを知っており、それを期待して入学した学生も多くいる。当室のことを知らずに入学した 1 期生との違いは明らかであった。

2013 年度は 2 回生(2 期生)、1 回生(3 期生)が、それぞれの時間割で利用しやすい曜日に利用していた。

各年度共に、7 月の利用者数が多いことがわかる。これは七夕まつりに参加したことや、7 月末からの保育実習ⅡⅢの準備のため利用した 2 回生が多かったことによる。2012, 2013 年度 10 月は幼稚園本実習が行われ 2 回生が不在の時期であった。そのため利用者数は少ない。しかし、実習中の休日（運動会の代休など）に来学し昼休みを当室で過ごした 2 回生が少なからずいることは特記すべきことであろう。実習中にこうして相談しあえる場として利用されたのである。

後期は 2 回生が実習の振り返り作業をし、就職の実技模擬試験をし合う姿も見られた。一方初めての実習を前にした 1 回生の利用が次第に増えてきた。

②ワークショップ

あらかじめ、主な活動とその設定中に歌う歌を決めて臨んだ。例えば、2012 年度前期は表 2 のような内容で行った。

七夕まつりのようなイベントでは参加が多くなっているものの、平均参加は 6 人である。ワークショップ日以外の昼休み利用者数と差がないことから、学生は特にワークショップへの参加を目的として来室したのではなく、昼休み開室利用として来たところワークショップが行われておりそのまま参加していたということではないだろうか。そこで、2013 年度はワークショップの曜日を決めず、在室の学生の様子に応じて、季節毎の設定活動を積極的に行っていく方法に替えた。つまり、ワークショップの準備は常時しておき、学生の活動の様子を見ながらできそうなときに提示するというスタイルへと変更した。5～6 人が集まれるような活動設定をすると、落ち着いて取り組め、それを見ている学生が入れ替わり立ち替わり参加する、ということがわかってきた。

表2:2012年度前期ワークショップ

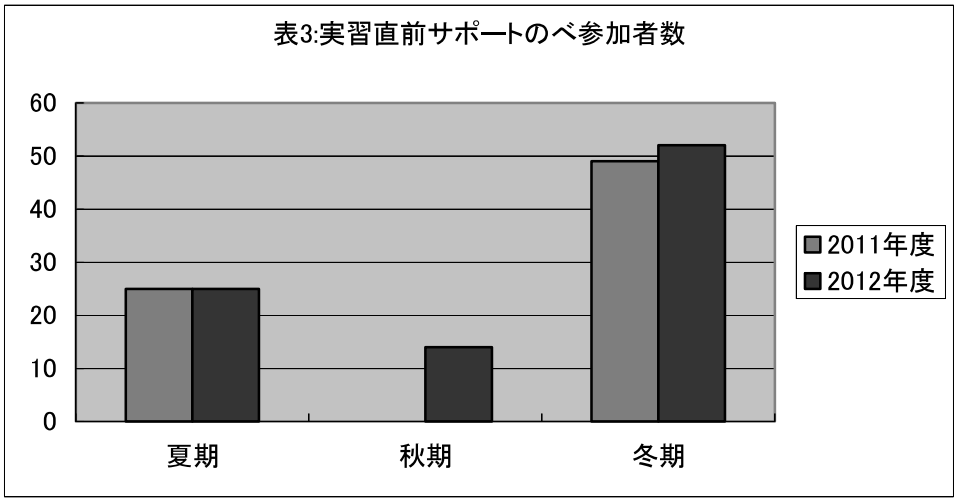
日にち	主な活動	歌
2012/4/11	折紙・もんぎり	ぞうさん・おはながわらった・ひらいたひらいた
2012/4/18	ビー玉で描こう	ぞうさん・おはながわらった・ひらいたひらいた
2012/4/25	新聞紙でカブトづくり、しょうぶ	こいのぼり・やぎさんゆうびん・あかいとりことり
2012/5/2	かみひこうき	こいのぼり・おかあさん・ことりのうた
2012/5/9	折り染め	かわいいかくれんぼ・おつかいありさん
2012/5/16	折り染め	かわいいかくれんぼ・おつかいありさん
2012/5/23	絞り染め	めだかのがっこう・しゃぼんだま
2012/5/30	絞り染め	めだかのがっこう・しゃぼんだま
2012/6/6	紙でっぽう	あめふりくまのこ・やさいのうた
2012/6/13	紙でっぽう	あめふりくまのこ・やさいのうた
2012/6/20	パラバルーン遊び	おほしさま・みずあそび
2012/6/27	七夕かざりづくり	おほしさま・みずあそび・たなばたさま
2012/7/4	七夕まつり	みずあそび・たなばたさま
2012/7/11	実習前準備	すうじのうた・げつかすいもくきんどにちのうた
2012/7/18	実習前準備	すうじのうた・げつかすいもくきんどにちのうた

③実習直前サポート

2011 年度は夏期 3 日間(2 回生対象)、冬期 1 日間(1 回生対象)の計 4 日間、2012 年度は夏期 3 日間(2 回生対象)、秋期 2 日間(2 回生対象)、冬期 2 日間(1 回生対象)の計 7 日間、あわせて 11 日間行った。FD 活動を終えた 2013 年度は行っていない。2011 年度、2012 年度の参加数は表 3 に示した。

冬期の実習直前サポートは 1 回生対象である。この時期の利用が多いのは、初めての実

習を前にして不安を抱えているものの、独力で準備する手だてもなく、当室を利用したからと考えられる。

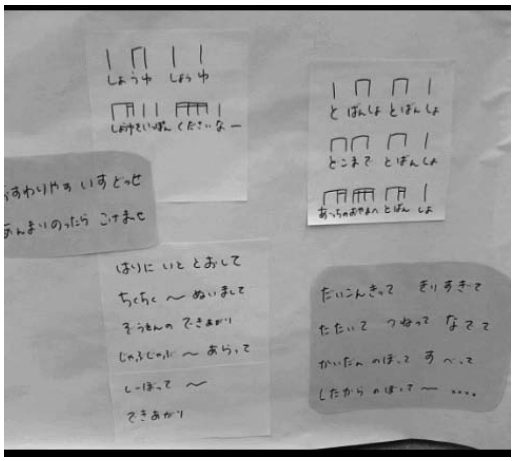


2012 年度冬期実習直前サポートに参加した学生(A さん:1 回生)にインタビュー(2013/4/22,12:20-13:10)を行った。A さんの語りの一部は下記の通りである。

「授業でちょこっとだけ手遊びをしたり、ということはあるが、たっぷり経験することはなかった。」「直前サポートで、もう一回確かめようと思って来た。」「保育実習が始まって、おぼえていたからできた。それがなかったら、歌って出来なかったと思う。積み木とかで遊んでる子の所に行ってただろうと思う。」「(普段から) 昼休みによく来てるので、色々見ていたことが役に立った。例えば季節の歌が貼ってあって、時期ごとに貼り変えているので、こんな歌歌うんだと思っていた。多目的室に来ることは保育の勉強になる。」「直前サポートでは、自己紹介の仕方を考えられたのが良かった。他の人がしているのを見て、そんな風にするんや、できるんやと思った。」(写真 5)(写真 6)

2012 年度秋期実習直前サポートに参加した学生(B さん、C さん : 2 回生)へのインタビュー(2012/12/14, 12:20-13:10)の一部を記す。

「(昼休み開室に)もっと早くから利用していれば良かった。案内はされていたけれどピンとこなかった。」「全然堅苦しくなくて、実習直前もおしゃべりしながら相談できて、助かった。」「実習中も、多目的室があったから保育のことを考えられた。」「実習中も相談に来れた。」「多目的室のことがよくわかったのは実習が終わってから。そういうことやったんや、って。」



(写真 5)あそびうたの歌詞を壁に貼っていた

(写真 6)手遊び歌をしてみた

④教材集作り

2012 年度 2 回生(1 期生)は『保育実践教材集』をもとに実習直前の準備をし、また実習中も活用した。実習後の感想を以下に記す。

よかったところ

・みんなの案を共有しながら自分の指導案を書くことができたので良かった

・秋だけでなく春夏冬も作りたい・持っているだけで安心感があった

・何度も見直し活用した・5,10 分の保育案や年齢別の保育案など指導案を考える時に参考になりました

利用しにくかった理由

・量が多すぎる・読んでもイメージしにくい・設定保育の担当がない・他資料で準備できた

・身近に相談できる人がいた・生徒が考えたので本当に良いかわからなかった

・新しいことを自分で考えてみたかった

・部分実習でやりたいことはもっと事前に考えてあったので今回は利用しなかった、でもこれから活用できると思う

現在はこども教育多目的室内で閲覧できるようになっており、2 期生以降の学生が教材集として活用している。

5.3 年間を振り返って/残された課題

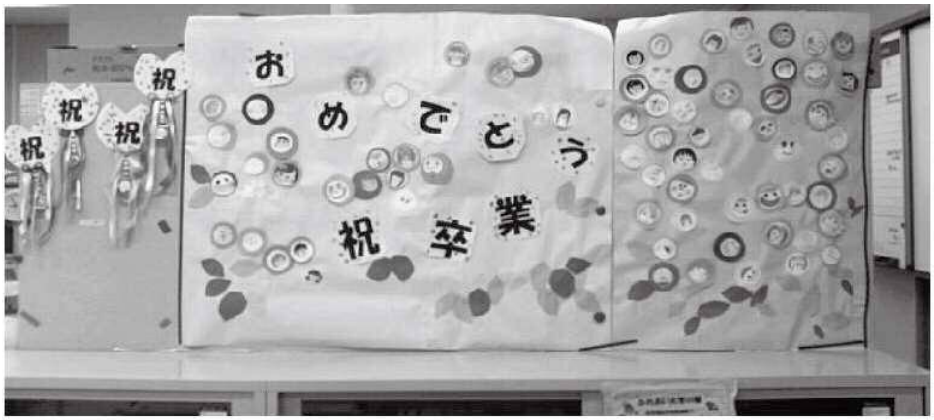
こども教育多目的室は保育への志を持つ学生の正課外活動の場として活用されてきた。保育室のような環境の中に身を置き、仲間と昼食を摂りながら気兼ねなく話し、授業で学んだことを思い出しこどもの活動をイメージしていくのである。当室の業務に当たる教員には、学生が正課授業でどのように学んでいるかを知り、それを統合するためのしかけ作

りをすることが求められる。5～6 人が身を寄せて活動できるような環境設定をしておくことが大切であることがわかってきた。例えば、コーナーでカルタ遊びができるようにしたり、こどもの遊び歌の歌詞ボードを貼っておくなどの具体的な細かな環境作りである。そうして仲間や在室している教員とお互いに見合いながら一緒にしてみる経験を重ねることによって、少しずつ保育実践力が涵養されていくのであろう。「多目的室のことがよくわかったのは実習が終わってから」と語った 2 回生の言葉はそのことを表している。地道な取り組みが求められるのである。

一方、実習を直前にした学生は、実習を切り抜けるための即役立つ保育アイデアを求める。直前の余裕のない時に、いかに仲間同士で相互に保育案を練りあっていくことができるのか、それをどのように見守り支える場へと導いていけるのか、課題は大きい。

【付記】

第 5 分科会午後の討議の後、会場校内のこども教育多目的室へ見学をお誘いしたところ、10 人の方が参加された。床暖房があり、ゆったりとした気分で過ごせる場であること、その中で保育環境が見渡せること、仲間と共に居られること、必要な時には在室の教員に声をかけることができること、等がこの場の特徴であることを確かめ合えた。私は、昼休みおよび実習直前には当室での学生対応に専念したのであるが、正課外であるゆえ、学生の自主活動への気運の高まりを待つことが求められた。室内で手作業をしながら学生がどのように感じ育ちつつあるのかを見取ることが必要とされた。学生理解に努め、学生への願いを持ち、そして具体的な関わりを考えて行なっていくこと、これらの連動が絶えず行なわれることが大切となるだろう。



大学の特性を生かした学習支援室づくり
―“青山コミュニティ”における学びの連鎖―

大阪青山大学・大阪青山短期大学 学習支援室長 教授　三木　慰子

大阪青山学園は短期大学の開学から47年にわたり「少人数で丁寧に行う教育」「本物に触れる教育」を一貫して実践。現在、大学（健康科学部　健康栄養学科、子ども教育学科）と短期大学（幼児教育・保育科、調理製菓学科）とから成り、学生総数は800人。いずれも、管理栄養士、小学校教諭、幼稚園教諭、保育士、製菓衛生師、調理師などの資格を活かして、多くの卒業生が社会に出て活躍している。

さて、学習支援室は2008年後期に誕生。本学に適した学習支援室をとの願いから教員向けのアンケート調査を踏まえ、日々の学びを支えるサポートと幅広い学びのニーズに応えるサポートの２本柱で、学習相談、アカデミックスキル向上支援、ポートフォリオ作成支援、ライフスキルセミナーなどを行ってきた。

当時、学習支援室のラーニングコモンズ化、並びにライティングセンター化を将来構想としつつ、４名のスタッフで始動。筆者もその一人だったが、2013年度から室長になり、本学勤務歴20年の経験を活かし、本学園に学ぶ学生、巣立った卒業生の特性を理解した上での学習支援室づくりを実践してきた。

そこで、今回の発表では2013年度の４つの取り組みを報告し、よりよい学習支援室づくりのためにご指導を願えれば幸いである。

１つ目は学習支援室の環境づくりのために３つの部屋を設置。つまり、３つとは自習コーナーと個人学習用スペースを含む多目的コーナーの部屋、グループ学習室、個別面談室である。一人で自習する学生、グループでコミュニケーションを取りながら学ぶ学生、先輩学生への相談、個別面談を求める学生など、ニーズに応じた利用ができる環境を整えることができた。

２つ目は発達に課題のある学生を支援するためのプロジェクトづくり。近年、学習面での困難さの背景に発達障がいが推察される学生が増加している。そのため、2013年度から専門のスタッフを配置、個別面談室を活用。また、学生の支援ニーズに応じて、各部局とのサポート会議や外部機関との連携も行っている。さらに2013年度は教職員対象の講演会を２回実施し、全学でのサポート体制を固める努力をしている。将来的には障がい学生支援と連動した発達障がい学生支援システムの構築が必要と考える。

３つ目はライティングセンターとしての機能を強化。レポートの形式や構成についてサポートできる学習支援アシスタント（ＳＡ）を育てることが理想であるが、ＳＡの増員に難航中。現状は、毎日昼休みに文章表現の苦手な学生に対する指導や、次項に含まれるが、毎年、実習のお礼状や年賀状の書き方の教養ミニ講座を行っている。

４つ目は幅広い教養を身に付ける目的で、昨年度から教養ミニ講座を開催。講師は各学科から選出された運営委員の教員である。ただし、受講生確保が難点。それゆえ、本学園の特性の振り返りをした。本学園は資格免許取得のため、ほとんどの時間割が決まっており、授業において、他学科、他学年の交流ができない状態にある。そのため、クラブ活動でもしない限り、先輩からの情報網は遮断。これでは井の中の蛙、消極的にならざるを得ない。そこで、筆者の授業で“青山コミュニティ”という場を設定し、異文化体験（年代の違う人や先輩との会話）を学習支援室のスタッフの協力のもと行ってみることにした。すると、これが好評。学習支援アドバイザーとの会話から支援室の活用方法やアドバイザーの職務経歴を知ることで室を身近に感じるようになり、そして、先輩との会話からこれからの学生生活の不安が解消したようである。その後、学生たちは学習支援室のスタッフに声かけをするなどの変化が見られた。

後期には、教養ミニ講座“青山コミュニティ”として、２人の卒業生を講師として招き、「保育に役立つあそび歌＆絵本の読み方」と「お箸の使い方―保育の現場からの声―」などの講座を主として幼児教育・保育科１年次生を対象に開き、そこではさまざまな学びの連鎖が起こった。

以上、４つの取り組みを踏まえた上で、学習支援室の利用者（全学生の 31%）対象のアンケート調査をし、客観的な資料を踏まえた上で、次年度からの室の運営に役立たせようとするものである。

さて、大阪青山学園は小規模な大学ゆえに、教職員の目が行き届いた、非常に丁寧な教育をめざしている。本学園の学生の特性を理解し、それぞれに合った支援とは何かを考えながら、時には力を貸し、時には見守り、時には手を差し伸べ、時には突き放す・・・、学習のための支援のあり方を毎日スタッフ間で話し合い、模索している。

「おはようございます」「授業にいってきます」「いってらっしゃい」「お帰りなさい」そんな不思議な会話が飛び交っている学習支援室。居心地の良さはいつしか甘えにならないように、一人一人の学生の育ちが実感できる、そんな場所にするために日々、楽しい学びの場の提供を“青山コミュニティ”として各学科へ発信したいと願

ってやまない。その上で、学習支援室のラーニングコモンズ化、ライティングセンター機能のさらなる強化、障がい学生支援システムの構築という夢の実現をさせたいと考えている次第である。

（平成 26 年 3 月 6 日提出）

《補記》

平成 26 年 4 月 1 日より大阪青山短期大学は大阪青山大学短期大学部に名称変更予定。

第19回ＦＤフォーラム第5分科会 平成26年2月23日

大学の特性を生かした
学習支援室づくり
ー“青山コミュニティ“における学びの連鎖ー

大阪青山大学
大阪青山短期大学

学習支援室長　教授　三木　慰子

1

大阪青山学園の沿革

昭和42年	大阪青山女子短期大学開学（家政科・幼児教育科）
昭和48年	大阪青山短期大学と校名変更
昭和56年	大阪青山短期大学 国文科
昭和60年	大阪青山短期大学 英米語科
平成8年	北摂キャンパスの新体育館落成
平成11年	大阪青山歴史文学博物館開館 全学科共学となる
平成17年	大阪青山大学開学（健康科学部　健康栄養学科）
平成20年	大阪青山大学　健康科学部　健康こども学科
平成25年	健康こども学科が子ども教育学科に名称変更
平成26年	大阪青山大学短期大学部に名称変更

2

大阪青山学園（箕面キャンパス）

3

大阪青山歴史文学博物館（北摂キャンパス）

4

大阪青山学園の建学の精神

高い知性と学識と豊かな情操を兼ね備えた品位ある人材の育成

5

大阪青山大学の使命・目的および教育目標

使命：グローバル化する現代社会にあって、わが国の文化と伝統に基づいた感性を磨き、知性、倫理性及び創造性を備えた専門的職業人を育成し、もって地域社会に深く貢献する。

目的：高い志をもって努力する専門的職業人を育成することを目的とする。

6

教育目標

（1）自分の進路に自信と誇りをもって臨む人
（2）優しい眼差しをもって豊かな人間関係を築ける人
（3）日本の文化と伝統を理解し感性と知性を磨く人
（4）倫理性と創造性をもって社会の一員として役立つことをめざす人
（5）グローバルな視点をもって地域社会に貢献できる人

7

大阪青山短期大学の教育目標および教育方針

教育目標：豊かな情操と健全な心を育み、社会のさまざまな分野において信頼され活躍できる高度な専門知識と能力を身に付けることを教育目標としている。

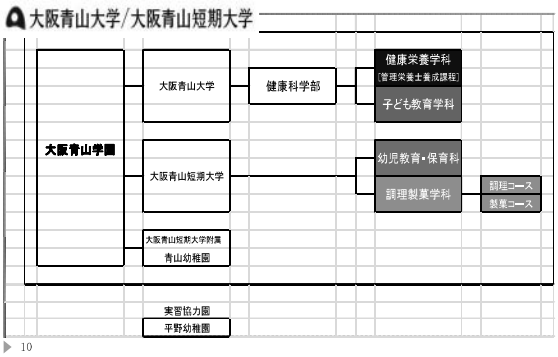
8

教育方針：

（1）豊かな情操と人間性を育む教育
（2）一人ひとりの個性を見据えた行き届いた教育
（3）優れた施設と設備、文化財など本物に触れて学び、感性を磨く教育
（4）自らの将来を見つめ、専門的知識を身につける教育
（5）国際社会に寄与する人材を育てる教育

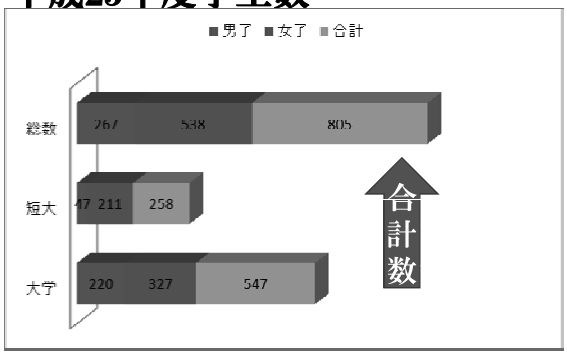
9

大阪青山学園組織図



10

平成25年度学生数



11

学習支援室開室準備（平成20度年7月）

教員向けアンケート調査結果

① 学習相談
② 学習スキル指導
③ 自習活動の支援
4 リメディアル教育
5 スチューデントアシスタントの育成
6 学生の学びを広げる活動
7 学生の自主性を育てるための活動
8 キャリア教育

12

第5分科会

学習支援室の役割（平成20年度後期～）

１.日々の学びを支えるサポート

学習に関する相談や学習面での実力アップを支援する

①学習相談
②アカデミックスキル向上支援
③ポートフォリオ作成支援

２.幅広い学びのニーズに応えるサポート

「普段、学んでいることをもっと深く学びたい」「日頃の授業以外の事柄も学びたい」「大学院に進学したい。留学したい」といった幅広い願いに応えるためのアドバイスや様々な学習機会を提供する

①学習支援室オフィスアワー
②ライフスキルセミナー
③自習活動

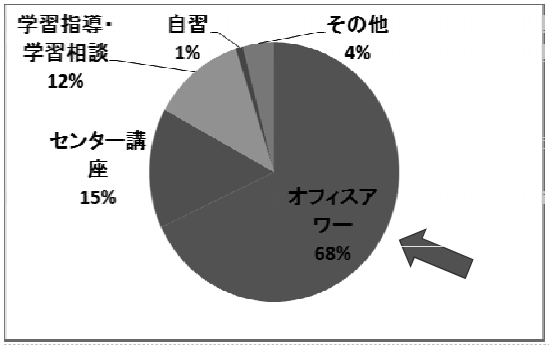
13

平成20年度当時の学習支援室スタッフ

室長（教職経験者、臨床心理士、上級教育カウンセラー）
学習支援アドバイザー1名（教職経験者）
大学教員１名（心理学専門）短大教員1名（国文学専門）

14

平成20～21年度における学習支援実績



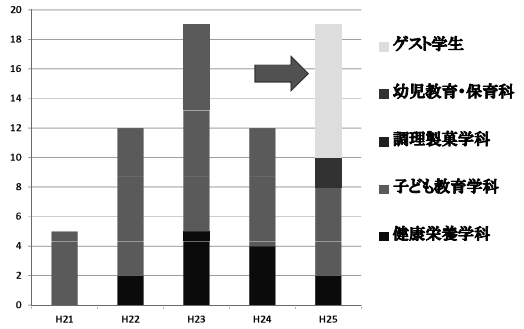
15

平成25年度のスタッフ

＊室長（国文学専門）
＊各学科から選出された専任教員による運営委員7名
＊学習支援アドバイザー：学習支援担当教育職員2名（発達支援専門1名、いずれも教職経験者）
＊学習支援アシスタント（ＳＡ）
2年次以上の学生で、学科内成績上位20％以内、在籍学科運営委員の推薦、もしくはアカデミックスキルに係る体系的な講義を受講し、成績が優を取得した学生。10名

16

ＳＡの人数の推移（平成21～25年度）



17

平成25年度の取り組み

１．室環境の充実
２．発達に課題のある学生に関する学習支援
３．ライティングセンター機能の強化
４．教養ミニ講座の充実

18

第5分科会

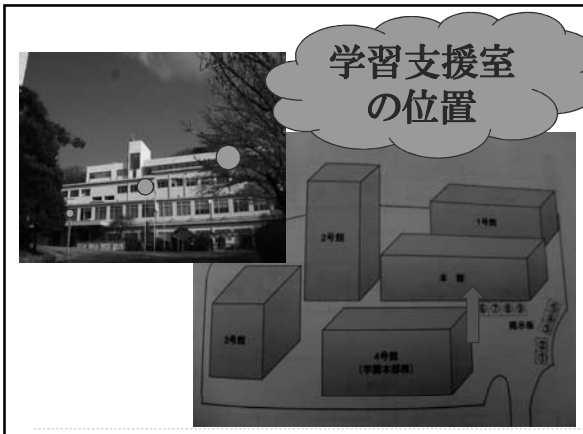
1.室環境の充実

利用者数の増加

グループ学習室
面談室（個別相談室）
個人学習用スペース

目的に応じた
環境づくり

19



20

自習コーナー

21

多目的コーナー

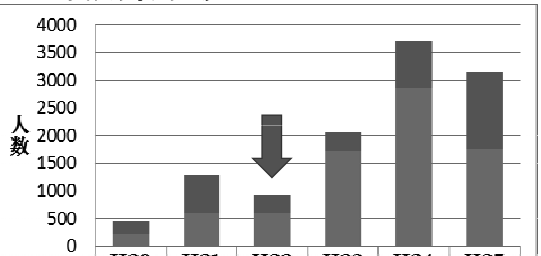
22

23

グループ学習室　　面談室

24

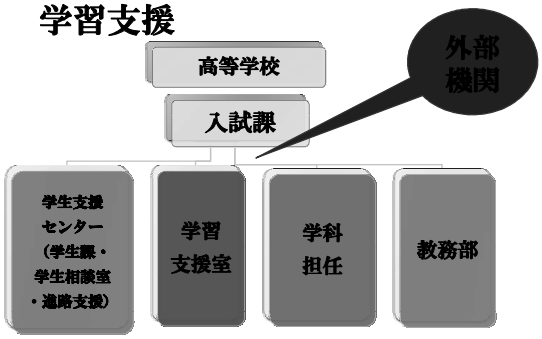
室の利用者状況（平成26年2月12日現在）



	H20	H21	H22	H23	H24	H25
■短大	236	675	331	360	853	1386
■大学	220	603	590	1715	2861	1764

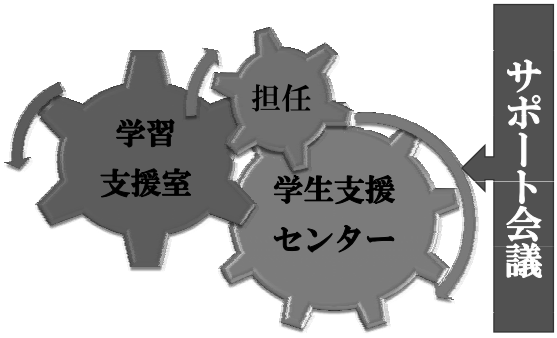
25

２.発達に課題のある学生に関する学習支援



26

各部署との連携



27

発達障がい学生支援ー教職員対象講演会

1.「大学における発達障がい学生の理解と支援」
7月11日（参加者：64名）
FD 推進委員会・SD 推進委員会との合同企画

2.「発達障がい学生の特性理解と

障がい学生支援と連動した発達障がい学生支援システムの構築

28

３．ライティングセンター機能の強化

29

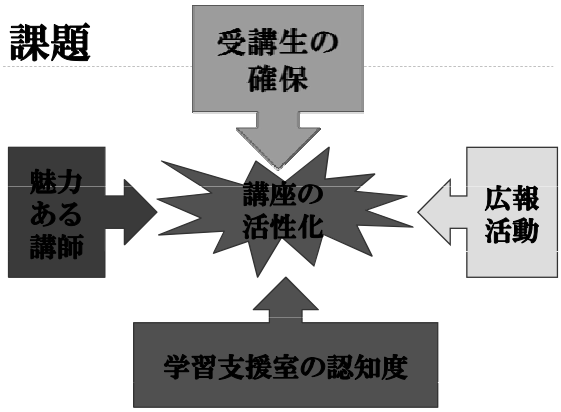
４．教養ミニ講座の充実

平成24年度から学習支援室スタッフ、ゲスト学生、卒業生が講師になり、幅広い教養を身に付けることを目的として企画された講座

「新茶を味わう」「心とからだのほぐれる手遊び」
「友達・恋人、家族とケンカしない方法」
「お礼状の書き方と添削」「手帳の効用」
「自分の体を知ろう～健康と運動～」「絵画を読む」
「しあわせな人間関係を築こう」「習慣のつくり方」
「自分の体を知ろう～健康と食～」
「お弁当講座」（健康栄養学科3年次生のＳＡ）
「ちょいトレ英会話」（健康こども学科2年次生）

30

課題



31

大学の特性理解

★資格免許取得のために、ほとんどの時間割が決められがち。
★授業において、他学科、他学年の交流が困難。
★先輩からの情報網は遮断しがち。
★井の中の蛙、消極的になりがち。

32

“青山コミュニティ”誕生への実験的講義

短大幼児教育・保育科1年次生
「子どもと言葉」の授業とのコラボ

「学科や年代の異なる人との
コミュニケーションを経験する」

ゲスト講師：学習支援アドバイザー
ＳＡ（4年次生）2名

33

短大幼児教育・保育科１年次「子どもと言葉」

“青山コミュニティ”

- 学習支援室の紹介
- 年代の異なる人との会話
- 大学の先輩からのメッセージ

34

学習支援アドバイザーから学習支援室の利用方法などを取材中

職務経験を取材中

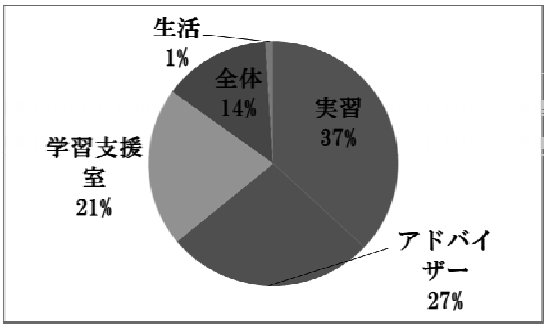
35

学生生活で苦労した体験談を語る

実習日誌を見せてもらい、幼稚園実習への準備についての話が弾む

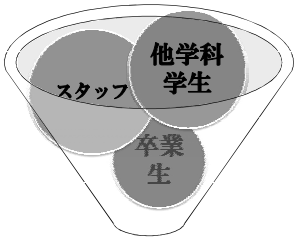
36

“青山コミュニティ”（60分間）の感想キーワード



37

学習支援室は場の提供をする



学びの連鎖

38

教養ミニ講座

青山
コミュニティ
誕生

39

“青山コミュニティ”① 7/8～12

「試験目前！先輩とのコミュニケーションで、不安を解消しよう」

目的：学習面における学生の悩み相談の場を設けることで、先輩との交流をはかり、学生生活を円滑に過ごすこと

ＳＡ：４年次生４名、３年次生２名
ゲスト学生：２年次生６名

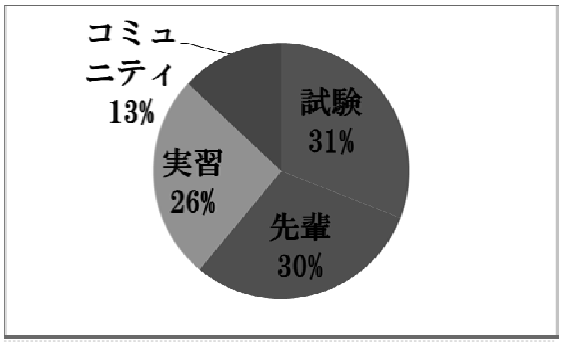
40

悩み
解消の糸口

グループで
マンツーマンで
昼食を摂りながら・・

41

“青山コミュニティ”の感想キーワード



42

第5分科会

“青山コミュニティ” ②　10/1～4

「紙芝居・絵本の読み聞かせの方法を学ぼう」

目的：今、そして、将来役立つ、子どもとの関わりに必要なスキルである絵本の読み聞かせや紙芝居の演じ方を身に付けるため

ゲスト学生：４年次生２名、２年次生８名

43

４年次生の落ち着いた絵本の読み聞かせに圧倒される１年次生

２年次生から４年次生までの先輩同士が刺激し合っていました

44

“青山コミュニティ” ③　10/5

「楽しく学ぼう！保育に役立つ
あそび歌 ＆ 絵本の読み方」講師：卒業生

45

楽しい
90分！！

46

“青山コミュニティ” ④　11/30

「お箸の使い方
ー保育の現場からの報告ー」
講師：卒業生

47

正しいお箸の使い方を学び、子どもたちに
日本文化を伝えてほしいですね

48

“青山コミュニティ” ⑤⑥　14’ 1/15,16

スポーツ界で活躍した
２人の学生の体験談

大阪長居国際マラソンの女子ハーフマラソン優勝者
第７回アジアジュニア武術大会の金メダリスト

49

「私のマラソン人生
～楽しいと思う大切さ～」

短大２
年次生

50

大学１年
次生

「武術太極拳ー金メダルへの道ー」

51

“青山コミュニティ” の意義

１．学科・学年を越えてのコミュニティの場
２．先輩から後輩への学びの連鎖
３．社会人としての学びを後輩へ繋ぐ

学習支援室が身近な存在

52

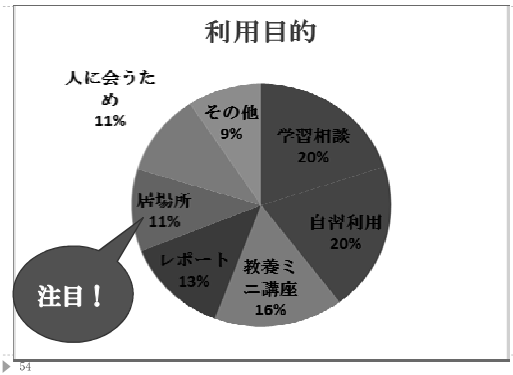
学習支援室利用者対象アンケート調査実施

実施日：平成25年11月下旬～12月上旬
アンケート記入者:250名（全学生数31%）

1.利用目的
2.利用回数
3.室のイメージ
4.使用利点
5.要望
6.意見

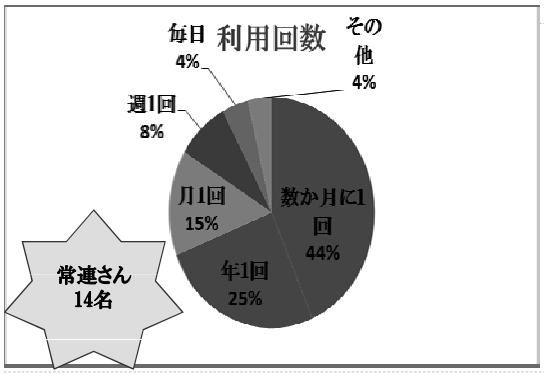
53

アンケート集計結果

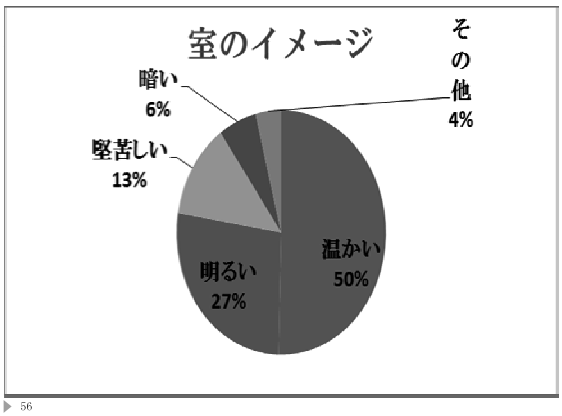


54

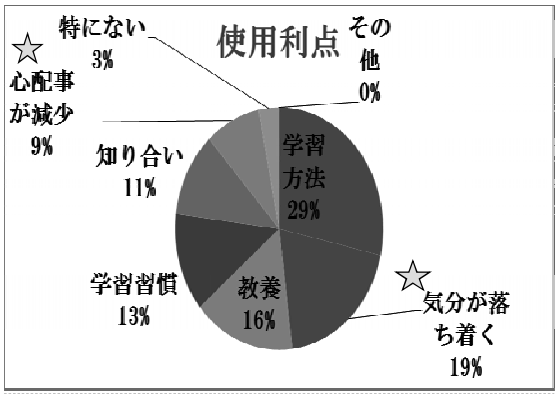
第５分科会



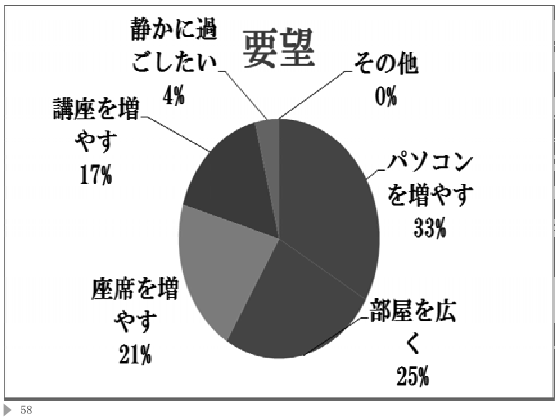
55



56



57



58

学習支援室の今

学生側：居場所（おはようございます、授業に行ってきます、ただいま、さようならと言える場所）
自習、企画会議、ゼミでの話し合いの場、先輩や教員、アドバイザーとの学習相談

教職員側：相談場所
（学生相談、サポート会議、身の上相談など）

スタッフ側：学生それぞれに合った支援法を考え、スタッフ間での共有と他の部署との連携。

59

そして、これから・・・・。

★ラーニングコモンズ化
★ライティングセンター機能のさらなる強化
★障がい学生支援と連動した発達障がい学生支援システムの構築

60

61

学生の学びを育む学習環境を構築するために

関西大学 教育推進部 助教　　岩﨑　千晶

2014年2月23日　第19回FDフォーラム　大学コンソーシアム京都
於　龍谷大学

第五分科会
「教育活動に果たす理想的な環境とは」

学生の学びを育む学習環境を構築するために

関西大学　教育推進部
岩﨑千晶
ciwasaki@kansai-u.ac.jp

本日の流れ

1. 学生の学びを育む学習環境設置の背景
2. ラーニングコモンズに代表される学習環境の現状、特徴
3. 学習環境を活用しての効果と課題
   ー関西大学のコラボレーションコモンズを事例に
4. ラーニングコモンズ運営における配慮

3

1. 学生の学びを育む学習環境設置の背景

- なぜ学習支援室、協同学習のスペースができてきたのか？
- 新しい能力の育成
  - 学士力、社会人基礎力
  - 21世紀型学力、PISA型学力（キーコンピテンシー）
- 他者と協働して学ぶ
- 道具を使って学ぶ
- 自律的に学ぶ（活動する）

4

新しい能力の育成を育む教授・学習方法

- アクティブ・ラーニング　（中央教育審議会2012）
- 授業者による一方向的な知識伝達型の授業を乗り越える能動的な活動が含まれるものはすべてアクティブ・ラーニングである（溝上2012）
- 学生が意義のある学習活動を行い、彼らが実施していることに対して深く考える（思考する）ことで、学生を学習プロセスに従事（engage）させること（Prince2004）
- 受動的な学習（Passive learning）の反対概念（河合塾2012）

アクティブ・ラーニングとは

情報を受け取るだけの講義を超えた学生の能動的な学習活動を含み
学生が取り組んでいる学習活動に対して深く思考し、
学習プロセスに積極的に関与することを目指した教授・学習方法
（岩崎2014）

5

アクティブ・ラーニングの特徴

- 学生は聴くことを超えた学びに関与する
- 情報を伝えることよりも、学生のスキルの育成を重視する
- 学生は、高次の思考が求められる取組に関与する（課題の分析、構造化、評価など）
- 学生は、リーディング、ディスカッション、ライティングに関連する活動に従事する
- 彼ら自身の価値や姿勢に対して探求することが重要視される

（Bonwell 1991 p.2）

- 協同学習、問題解決学習、プロジェクト学習
- グループワーク、ディベート
- クリッカー、ミニレポートを活用した授業

他者と共に学ぶ　／　思考のプロセスや成果を可視化（グループワーク・議論）　／　授業外の学習・学習支援（自主学習・社会連携）

6

1. 学生の学びを育む学習環境設置の背景

授業：他者と共に学ぶ　／　思考のプロセスや成果を可視化（グループワーク・議論）　／　授業外の学習・学習支援（自主学習・社会連携）

図書館・教室：個人学習スペースの限界　／　書籍の電子化（インフォメーションコモンズ）

文科省：学修時間の確保　／　文科省による設備整備助成

学習支援室、協同学習スペースの設置

7

2. ラーニング・コモンズに代表される学習環境の現状、特徴

- 2009年ごろから国内でLCを備えた図書館が増える （2012年226館（09年の2倍） 文科省(読売新聞2013年8月23日夕）
- 図書館の機能強化
- ICTを活用した双方向型の授業
- 自修支援

- 「学修環境充実のための学術情報基盤整備の在り方」（科学技術・学術市議会学術情報委員会2013）

- 学習支援室、ラーニング・コモンズ
- グローバル・コモンズ、スチューデント・コモンズ
- コラボレーション・コモンズ、アカデミック・コモンズ など

…目的・特徴に応じた名称

9

ラーニングコモンズの定義

- 利用者に対して図書館が持つ機能、情報技術、学習支援を機能的、空間的に統合（McMullen 2008）
- ネット世代の学習支援を行う図書館施設もしくはサービス機能（米澤2006）
- （図書館を主軸に）協同的な学習や自律的な学習を支援する学習施設

10

ラーニンズ・コモンズの構成要素

- 協同学習のスペース
- PC利用の環境（PC教室、PC貸出：AV機器、編集機器）
- 学習支援（データベース・資料検索、リサーチ手法、ライティング、理数系科目、履修助言、外国語、プレゼンテーションの支援）
- 留学生との交流スペース
- 打ち合わせ・セミナー・イベント等で利用されるスペース
- caféエリア

（McMullen 2008、井下2013）

16

インフォメーションコモンズからラーニングコモンズへ

- ワンストップサービス

（Lippincott, J.K. 2012）

- 図書館、ライティングセンター、ITセンター、教育開発支援センター
- 新しい教材、教授学習法に関心が高い教員向けのセミナー
- 組織間の連携が必要

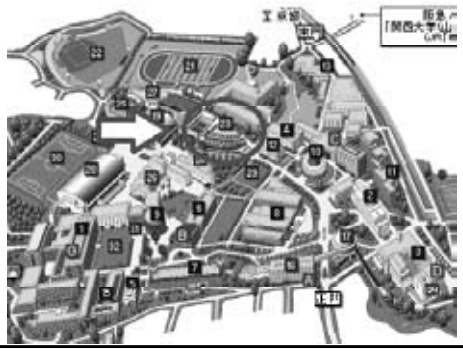
17

3. 学習環境を活用しての効果と課題 ―関西大学のコラボレーションコモンズを事例に

- コラボレーション・コモンズ（2013年4月開設）
- 「凛風館」1F（1012㎡）を活用
  - メイン・キャンパス中央に位置
  - 大学生協、購買機能
  - 学部を超えた学生、教職員が集う場
- 食事をし、生協に立ち寄るといった学生生活のサイクルにコモンズ利用の組み込む

18

3. 学習環境を活用しての効果と課題 ―関西大学のコラボレーションコモンズを事例に



19

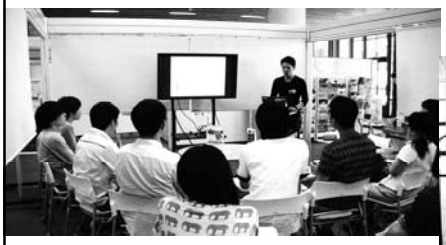
第5分科会

関西大学　コラボレーションコモンズ

##

グローバルエリア　外国語会話交流会

留学Cafe



留学帰国生によるミニプレゼン・質問会
6月5日、14日の2回実施

留学生サポートアワー

H.O.M.E.千里交流拠点のスタッフに日本語の言葉遣いを質問する留学生
授業期間中の毎週水曜日13:30～14:30に計17回実施

ライティングエリア

- 大学院生博士課程のTAが学部生のドキュメント（レポート、プレゼン、レジメ）作成を支援

ライティングラボ

ライティングエリア

ライティングエリア　Learning Cafe

- 教育推進部の教員とLAが講師（カフェマスター）となり、プレゼン・ライティングをテーマに開くカフェ形式の講座
- 春学期に4回、秋学期に9回開催
- 秋学期には、カフェマスターを学生が務める「学生同士で行うラーニングカフェ」もLAを中心に3回開催

学生同士で学ぶLearning Cafe

コラボレーション・コモンズの効果

1. 正課学習を深める場
2. 正課学習で学んだことを活かす場
3. 課外で集まった課題を正課へつなげる
4. 課外で学んだことを深める場
5. 正課外の学び（インフォーマルラーニング）を深める場
6. 学部を超えた出会い・学びの場
7. 学びへのトリガー

28

ゼミ発表の打ち合わせ

ホワイトボード2枚を両面使用し、3人で発表内容を書き出す
コモンズラウンジにて

経済学部　2年生　男子学生1名、女子学生2名

西日本インカレ用発表打ち合わせ

貸出用パソコン・プロジェクターを使用して
ライティングエリアにて

経済学部　3年生　4名

環境都市工学部学生による調査活動

「油汚染土壌の汚染評価についての研究」のために、
臭気調査のアンケートを行う環境都市工学部の研究室メンバー，調査に参加する学生たち

Learning Cafe　正課で使うスライドを改善！

◆10月7日テーマ
相手に自分の意図を分かりやすく伝えるコツ！

◆10月25日テーマ
「いいね！」といわれるスライドをつくるコツ！

・自作のスライドを持ってきてもOK
・プレゼン大会への参加する学生のスライドを皆でチェック

Learning Cafe　卒論執筆のためリーディング手法を学ぶ

◆11月8日テーマ
文献を早く読むコツ①短い文章編

◆11月15日テーマ
文献を早く読むコツ②本まるごと1冊編

◆11月22日テーマ
クリティカル・リーディングとは？

卒業論文を執筆する4年生
学生のニーズに対応したテーマ

2. 正課学習で学んだことを活かす場

◆ 学生同士で学ぶLearning Café

◆ カフェマスターをLAが務め、学生同士で行うラーニングカフェ

◆ 秋学期に3回開催

第1回「司会と書記の役割」

第2回「みんなの考えをだしてみよう」

第3回「文献をわかりやすく整理してみよう」

3. 課外で集まった課題を正課へつなげる

- ライティングラボに寄せられた課題は，レポート作成における学生の躓き
- 「文章力を磨く」，「レポートを作成する」などを担当している教員，レポートを課す教員にフィードバック
- 成果を担当する教員と学習支援の担当者との連携

38

4. 課外で学んだことを深める場

◆12月2日テーマ
『議事録を作ってみませんか？
～ノートテイクのスキルの応用～』
第1・2回
「議事録を作成してみよう」

・インターンシップに参加した学生

議論の整理が上手な他大学の学生

「私も，議論を整理したい！」

5. 正課外の学び（インフォーマルラーニング）を深める場

システム理工学部の学生サークルによる勉強会
上位年次性が下位年次性に電子回路、プログラミングをレクチャーする

6. 学部を超えた出会い・学びの場
7. 学びへのトリガー

- こちらは阪大のスチューデントコモンズで撮影させてもらいました！

- 様々な学部の学生，多様な学習内容
- ホワイトボード，PC　→思考の可視化

47

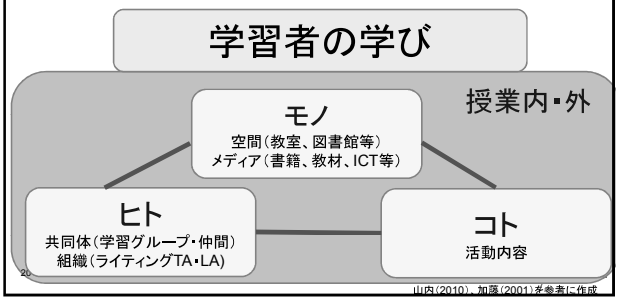
コラボレーション・コモンズの課題

- 学習支援に向かう学生の増員
- 正課との連携
- 評価測定 （eポートフォリオ、入館記録、アンケート調査、フォーカスグループインタビュ）
- 社会連携 （学生以外の人と活動できる場づくり）

48

学習環境の構成要素

- 空間、活動、共同体、人工物 （山内2010）
- ヒト（組織）・コト（活動）・モノ（道具）（加藤2001）



山内（2010）、加藤（2001）を参考に作成

配慮すべき点

- ヒト
  - 組織の垣根を越え、継続的に協働する組織体制
  - 学生スタッフの育成
  - コモンズを発展させていくコミュニティの醸成
- コト
  - 目的に応じた学習環境のデザイン・エリア分け（OPENEND！インフォーマルな利用！）
  - ラーニング・コモンズで提供する学習支援
  - 授業との連携
  - 教員が授業デザインを検討する場
- モノ
  - 目的を実現させるツールの選択
  - モノの置場
- 利用状況を踏まえた柔軟なリデザイン！定性・定量的調査

50

学習環境を設置する際の問い

- 生成されると望ましい学びは？どんな力を育みたい？
  - 初年次？キャリア？大学生活全般？グローバル？社会連携？
  - 授業と連携する？
  - 学修時間を増やす？
  - 単独学習や協同学習のどこに焦点を当てる？
  - 学生と教員の交流を推進する？
- どの組織と、（誰と）連携できそうか？
  - どの授業で使ってもらえそうか？
  - 誰が学習支援を担えそうか？
  - 誰が学習支援スタッフを育てらそうか？
- いつまでに、どこまでできそうか？
- どこからならできそうか？

Scott 2012「ラーニング・コモンズ」第7章、勁草書房）

51

参考文献

- Bonwell, C.C.（1991）“Active Learning: Creating Excitement in the Classroom”, J-B ASHE Higher Education Report Series (AEHE)) Jossey-Bass
- 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（答申）平成24年度8月28日教育推進基本計画
- 井下理（2013）「学習環境としてのラーニング・コモンズ」IDE, No556, 12月号, pp.4-10.
- 岩﨑千晶（2014年3月刊行予定）『大学生の学びを育む学習環境のデザイン　ー新しいパラダイムが拓くアクティブラーニングへの挑戦ー 』, 関西大学出版部
- 科学技術・学術審議会学術情報委員会 「学修環境充実のための学術情報基盤整備の在り方」（科学技術・学術市議会学術情報委員会 2013）
- 加藤浩、鈴木栄幸（2001）「協同学習環境のためのインターフェイス」, 加藤浩・有元博文編著『認知的道具のデザイン』, 金子書房.

52

第5分科会

参考文献

- 河合塾（2013）『「深い学び」につながるアクティブラーニング』、東信堂
- Lippincott, J.K. (2012)『ラーニング・コモンズ』加藤信哉, 小山憲司 (編集),勁草書房
- McMullen, S.(2008) “US Academic libraries: today’s learning Commons”, http://www.oecd.org/unitedstates/40051347.pdf（情報取得日2013年3月7日）
- 溝上慎一（2013）「『深い学び』につながる工夫とは」，河合塾「「深い学び」につながるアクティブラーニング」，東信堂
- Prince(2004) "Does Active Learining Work? A Review of the Research", Journal of Engineering Education, Vol.93, No.3, pp.223-231
- 山内祐平（2010）『学びの空間が大学を変える』, ボイックス株式会社.
- 米澤誠（2006）「動向レビュー　インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ大学図書館におけるネット世代の学習支援」, 日本図書協会『カレントアウェアネス』, 289, pp.9-12.

53

第5分科会